

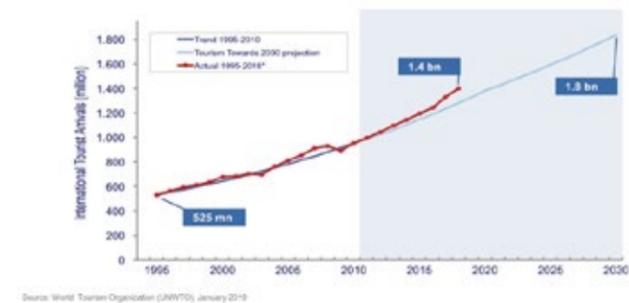


# 「移動する人生」において 宙吊りにされる主体性

僕は幼少の頃から父親の転勤で移動が多く、いわゆる郊外の国道沿いのマンションのようなところで暮らしてきた。そのためか、どこに行ってもよそ者や根無し草のような感覚が拭えない。大人になってからも、特段意識的に移動しようと思ってきたわけではないのだが、特定の地に留まる理由も特になかったので、人生このかた移動に移動を重ねてきた。

ある土地に根差して暮らすのではなく、「移動し続けることが人生のもの」になるような生き方は、人間のアイデンティティを揺らがせる。だがそれは、現在では実は、現代社会を生きる多くの人々が本質的に抱えている生き方ではないだろうか。付け加えると、僕は決してアウトドアを好むわけではなく、どちらかという家で小説や哲学書をつらつらと読んでいる方を好むが、にもかかわらず、映像撮影の仕事やアーティスト・イン・レジデンスの滞在制作でヨーロッパ・東南アジア・アフリカ各地を17ヶ国ほど転々と移動し続けてきた。この数字が多いのか少ないかは分からないが、世界各国で都市化が進んで移動が容易になり、国連世界観光機関(UNWTO)の世界観光統計(図1)<sup>1</sup>を見ても、予想を覆す速さで観光客の数が右肩上がりに増え続けている今日において、僕の「移動する人生」が現代社会の一端を象徴していることは間違いないだろう<sup>2</sup>。

Actual Trends vs Tourism 2030 Forecast- World



Source: World Tourism Organization (UNWTO), January 2019

図1：UNWTO 世界観光統計

僕が最初にカメラを手にしたのは18歳頃だっただろうか。それは中古のフジカ Z800 という8mm フィルムのカメラであった。1つのカセットで3分間の撮影ができるが、色温度や露出を正確に考えて照明を当てないと普通に風景を撮影することもままならない代物であった。当時から20年以上が経つが、カメラはなにがしかのHi8規格の機体からソニーのVX2000へと変化し、そのあとはコンデジやiPhoneで遊びつつ、最近ではパナソニックのGHシリーズを愛用しながら、様々な映像を記録してきた。

映画や実験映像を好み、自ら映像を撮りたいという動機も当然あったのだが、それ以上にカメラを抱えて出来事に関わることに興味があったのではないだろうか、といま自分自身の過去を振り返りながら感じている。そのような意味では、昨今の持ち運びが便利で高機能である小さなカメラは、様々な出来事に介入していくために、昔と比べて非常に使い勝手が良い。加えて、暮らしの中に映像が溢れているので、カメラを抱えて出来事に介入することの特殊さが薄れており、カメラを抱えたままでも対象との関係が築きやすいこともまた好ましく思われる。

振り返ってみると、僕の根無し草の感覚は、出来事の当事者感も同時に喪失させており、どうも出来事に積極的に関わることのできない、主体性を欠いたどこか斜に構える性質が身に染みていた。そのような僕がカメラを持って出来事に関わると、当事者でなくともその場にいる必然

性を感じられて、それが僕には心地よかった。対象との距離感や自分がその場においても違和感がない感覚は、出来事の当事者と僕とのあいだで独特な関係性を築くように思われた。そしてそれは、カメラを介してこそ感じられる感覚だった。このときの感覚、つまり当事者=ウチでもない、非当事者=ソトでもない、その「あいだ」における宙ぶらりんの視点から生まれる関係性が、事後的に気づいたことだが、昨今の僕の活動の根幹にある。

ウチでもないソトでもない、その「あいだ」における宙ぶらりんの視点、この感覚を象徴するテキストを村上春樹(1949-)が『国境の南、太陽の西』の中で綴っている。既に25年以上前の小説である。

僕はこれまでの人生で、いつもなんとか別な人間になろうとしていたような気がする。僕はいつもどこか新しい場所に行って、新しい生活を手に入れて、そこで新しい人格を身に付けようとしていたように思う。僕は今までに何度もそれを繰り返してきた。それはある意味では成長だったし、ある意味ではベルソナの交換のようなものだった。でもいづれにせよ、僕は違う自分になることによって、それまでの自分が抱えていた何かから解放されたいと思っていたんだ。僕は本当に、真剣に、それを求めていたし、努力さえすればそれはいつか可能になるはずだと信じていた。でも結局のところ、僕はどこにもたどり着けなかったんだと思う。僕はどこまでいっても僕でしかなかった。僕が抱えていた欠落は、どこまでいってもあいかかわらず同じ欠落でしかなかった。どれだけまわりの風景が変化しても、人々の語りかける声の響きがどれだけ変化しても、僕はひとりの不完全な人間に過ぎなかった。僕の中にはどこまでも同じ致命的な欠落があって、その欠落は僕に激しい飢えと渇きをもたらしたんだ。僕はずっとその飢えと渇きに苛まれてきたし、おそらくこれからも同じように苛まれていくだろうと思う。ある意味においては、その欠落そのものが僕自身だからだよ<sup>3</sup>。

ここに「欠落そのものが僕自身」という描写が見られる。これは、様々な場所を移動しながら、新しい場所や新しい生活とともに新しい人格を繰り返し作り続けていく中で、主体性が欠落したような感覚が芽生えてくるといことだろう。この感覚が、世界中の人々の心を動かす村上春樹の作品の中で語られていることは、世界中の人々もまた、僕の生まれ育ちとどこか似通った暮らしを経験していることを示唆しているのではないだろうか。そして、「移動し続ける人生」において、根ざすものを失い、宙吊りにされる主体性が多くの人々にとっての現実なのであれば、主体性の問題を出発点にした僕自身の作品制作についての言及から本稿を始めることに、まずはひとつの意義があると言えるのではないかと思われる。

-----

<sup>1</sup>UNWTO 世界観光統計「International Tourism Results 2018 and Outlook 2019」によると、2010年に発表された長期予測では、海外旅行者総数は14億人到達が2020年になると見込まれていたが、2年前倒しで達成した。2030年には18億人に達する見込みであった。

<sup>2</sup>本稿を執筆している2021年1月現在、コロナウイルスによるパンデミックで世界が動揺している。UNWTOは予測を下方修正し、海外旅行者数は、3~6億人程度まで減少することが予測されている。

<sup>3</sup>村上春樹(1995)『国境の南、太陽の西』講談社、pp.291-292